

健康教育

■ いまなぜ「心」の健康教育か

■ 根っこ、開く、つなげる

■ ログハウスの幼稚園 ～お山の大将 あつまれ～

岩佐 教之

塚田 孝

古谷野福子



いまなぜ「心」の健康教育か



家庭教育コンサルタント

岩佐 教之

はじめに

「親の心、子知らず 子の心、親知らず」の時代と言われています。自分の子どもが、何を考えているのか理解できないで、子育てに不安を感じている相談をよく受けます。親なのに子どもの気持ちがわからなくて、何となく共に暮らしている親子が、年々増加しているという調査も発表されています。

よく言われる親子の絆も、こうした世の中では、単なる形容詞に過ぎません。親と子の「心」が通じあわない深刻な現象の原因は、幼児期の子育てにあります。子どもへの愛着が強すぎて、一卵性母子の傾向となり「心」を育てなかったのです。親として、最も大切な子育ての目的は、子どもの「心」を育てることなのです。

心を育てる母親の影響

「人間は一番最初に会った教師と、一番最初に会った教室の、善し悪しできまる」と言われます。人間がオギャーと産声をあげて、最初に会った教師とは母親です。そして教室とは、言うまでもなく家庭なのです。

赤ちゃんは、人間として形成される初歩的なすべてを、母親から教わるのです。この世の中に生まれてきて、初めて出会う母親の影響力の大きさを、母親本人があまり意識していない人もいます。母親と家庭の善し悪しできまるなどと決めつけられると、不安に感ずるかも知れませんが、ここでの善し悪しとは断定的なものではなくて「影響力」と考えればよいと思います。

「人は環境の子」と言われます。私たちは自分を取り巻くもろもろの環境によって、生き方や考え方がきまります。ですから生を受けた赤ちゃんにとっては、常に寄り添う母親の影響力は絶大なものなのです。

同じ影響力と言っても、幼児期に与える母親と父親の影響を比較すれば、絶対に母親が大きいことは言うに及びません。特に、人間形成における基本的な習慣や「しつけ」では母親から学ぶものがきわめて多いのです。そうした母子のふれあいの中で、「心」が育っていくのです。

かと言って、子どもの「心」を育てるのは母親オンリーとは限りません。当然、父親や家族の影響も見逃すことはできません。成長する子どもを取り巻くもろもろの諸環境が、

知らずしらずの内に「心」を培っていくのです。子どもの「心」は、身体の成長と同じように年齢とともに、少しずつ発達していきます。泣く・笑うという本能的な行動から、言葉を覚えまわりの事象に興味を示すようになるころには、「心」も少し育ってきたと考えてよいでしょう。

子どもの「心を豊かにしたい」という親の願いから、幼いころから「習いごと」に通わず傾向もみられます。あまり小さい時からの「習いごと」は、親の見栄や虚栄だけの欲望で、感心できません。「心を豊かにする」という親の願いから離れて、単に技能の修練に偏ってしまいます。そしてより向上を期待して、無理矢理子どもの尻をたたくことになります。これでは、子どもの「心」を豊かにするどころか、義務感とプレッシャーからしぼんでしまいます。

子どもの心を育てるには

赤ちゃん時代から、子どもを健康でスクスク育てたいという親心は、いつの世でも同じです。「這えば立て 立てば歩めの 親心」これは、ご存じ小林一茶の句です。一茶は、わが子を幼い内に亡くしていますから、より親としての心情がにじみでているように思われます。そしてもう一句。「這え笑え 二つになるぞ きょうからは」

親ならば誰でも同じですが、わが子が健康で逞しく育てと願っています。現代は、生活環境が機能的となり、食文化も変容し健康食品も豊富で子どもたちの体位も、年々向上しています。テレビ画面でのスポーツを見ても日本の選手の体格は、外国選手にも劣らなくなっています。これは大変嬉しいことですがその反面、憂うべきことも多々あります。それは、子どもたちの身体は育っているのに、「心」が育っていないということです。

現代っ子の特色として、しばしばマスコミ

にとりあげられる傾向は、三無主義と五無主義の子どもたちが多いということです。三無とは、「遊ばず」「学ばず」「動かず」また五無とは、「無気力」「無責任」「無関心」「無作法」「無感動」だそうです。これは、一体何を物語っているのでしょうか。ズバリ子どもたちの「心」が育っていない証拠なのです。これは、言うに及ばず育てた親の責任であり大人の責任なのです。

「心の教育」を学校で？

相も変わらず、学校教育の荒廃が叫ばれています。いじめ・登校拒否・校内暴力・薬物乱用・援助交際。そして、殺人・自殺・傷害等々列挙するのが恐ろしいような、子どもたちの問題・事件が、マスコミをにぎわしています。その上、教師の教え子に対するセクハラまでが追い討ちをかけています。日本の教育は、これで大丈夫なのでしょう。

本来学校教育は、自ら学ぶ意欲を育て、個性を生かし、創造性をはぐくむ教育なはずで、そして、正義感や倫理観・人に対する思いやりの人間性を育てることが大切な目標であったはずで、それが知育偏重にかたより近年「偏差値教育」の様相を呈してきたわけです。と同時に、教育現場の混乱を打開する方策として、あらたにその柱として「心の教育」の充実が、大きな教育のテーマとして浮上してきたのです。

未来を担う青少年に、まっすぐに育ってほしいためのプランなのです。家庭教育で培うべき子どもたちの「心」の育成を、なんと学校教育に移行してきたわけです。

すでに述べたように、家庭は人間形成の最初場であり、子どもの成長発達にきわめて大きな役割を果たしています。優しさと厳しきの調和のとれた家庭関係の中で、人間的なふれあいを持ち、他人への思いやりや規範意識・公共心・責任感等が養われています。

そうした中で、発達段階に応じた「心」が育つのです。それを学校教育に移行したというのは、それなりのわが国の苦しいお家の事情があるわけです。

この問題を家庭教育のみに委ねきれないために、学校教育であらためて「心」を育てようとのねらいになったのです。学校教育では「心」が育たないと言うわけではありませんが、果たして一人ひとりの子どもの「心」がねらい通りに培われるかと言う点で、疑問を感じるのは私一人でしょうか？

それは、子どもの「心」を育てるのは家庭であり、それも幼児教育にあると考えるからです。「子どもは遊ぶために生まれてきた」とも言われます。そのいろいろな遊びを通して、小さな発見と驚きを一つ一つ重ねることで、「心」が大きく育つのです。新鮮な感動こそが、その原点なのです。教科学習優先・偏差値重点の学校教育では、感動は生まれてこないのです。

EQ・心の偏差値

学校の勉強さえできれば安心、という思いで子どもを育ててきた結果、友達と遊べないストレスに弱い、感情の抑制ができない等の「生き方」とまどって、自分を見失っていく子が増えています。現代は「心の時代」とも言われています。それは単に人々が心の安らぎを求めることを意味するだけではありません。心の発達、知識の使い方、自己表現の仕方、人との協調や生き甲斐の創造等、充実した人生を生きるために大切な要素をもっているからです。

学校教育の学習評価基準として、IQがあります。IQ（偏差値）が学歴社会におけるバロメーターとされてきました。かつての高校入試でも、IQが一つの目安とされてきました。しかし、IQの高い人間が、必ずしも人間性に優れているかと言えば、異論を唱え

る人も多くいます。IQとは「考える知力」です。考える力があっても、果たして人に対する「優しさ」や「思いやり」や「協調性」が高いとは限りません。

IQとともに、ここにきて改めて見直されたのが、聞き慣れない言葉ですが、EQです。ダニエル・ゴーマン著の「EQ・こころの偏差値」（講談社）が、書店に並んでいます。「心の教育」とか「心の時代」とかが叫ばれるようになったのも、IQを重視してEQを軽視した結果が、学校教育荒廃の原因に気づいたからです。

EQ (Emotional Quotient) とは、心の指数で心の発達度合いを表わす言葉です。IQを考える知力と言うなれば、EQは「感ずる知力」なのです。美しいものを美しいと感ずる心、人との出会いやふれあいを大切にする心、人を思いやる心、これこそ人間性の原点なのです。「心の教育」を学校教育の中で定着させることにより、「いじめ」や「校内暴力」が沈静化してくれたらと思います。

思いやりの心を育てる

思いやりの心は、口でいくら言っても育つものではありません。親子で一緒に、時間をかけて育てていくことです。それは、自分のまわりにいる世の中の人々は、みんなかけがえない存在であることを理解させなければなりません。自分は、たった一人で生まれたわけではなく、育ったわけでもありません。多くの人のお陰で、今があるのです。と、言うことは他人も全く同じで、だから自分を大事にするように、他人も大事にしなければならぬわけです。こうした実感は、日頃から暖かい家庭の営みの中で培われるのです。

また、思いやりの心は、感謝の心と一体になっているものです。したがって、ただ勉強だけを強要せずに、家族の一員として子どもを意識的に家事に引きずりこみ、「ありがと

う、助かった。」と、感謝の気持ちを子どもに言うことです。感謝されれば当然「やってよかった」という、思いやりの心が育つものなのです。

また、自己表現の力をつけることも忘れてはなりません。いじめられっ子の一つの特徴として、口が重い・自分を正当に表現できないといった面を指摘されています。これは、家庭に於ける会話不足にその要因があると思います。「自分はこう思う」「こうしたい」「こうする」等の意思表示が、発達段階なりに、はっきり言える子をそだてなければなりません。親子のおしゃべりも、子どもの心をそだてる大切な手立てなのです。

子どもに、家庭での存在感を持たせることも大事な「心育て」の方法です。存在感とはひらたく言えば、「生き甲斐」ということです。自分は、「この家に必要な人間なのだ」「親に心から愛されているのだ」という、自覚をもたせなければいけません。「あなたは勉強だけしていればいいの」ではなく、家の中の一員としての役割と責任をもたせることです。親が「無責任」な子を育てていると言われないうにしたいものです。

親が心の余裕をもつ

私は、河合製菓の要請で、各地の幼稚園や保育園に出かけて講演をいたします。そして先生方とも懇談をします。幼児期の子どもの実態や、現代の親の傾向なども、こうした時に話題になります。これは、過日訪れた北の町の保育者から聞いた話です。

Aちゃんは、昆虫類が大好きで、その生態をいつも熱心に観察していました。母親もAちゃんの興味を助長するように、暇があれば行動を共にしていたようです。

ある日のこと、Aちゃんが保育園に行ったあとで、部屋を掃除していると何か小さな音が聞こえてきました。不思議に思った母親が

部屋のあちらこちらを調べてみると、どうやらその音は、タンスの中から聞こえてくるようです。あわててタンスの引き出しを開けてみて、母親は思わず大声をあげてしまいました。何とタンスの引き出しの中から、生まれたばかりの「カマキリ」が、ゾロゾロと這い出してくるではありませんか。

Aちゃんの仕業です。排卵期を迎えた「カマキリ」を、タンスの中にいれておいたのでしょう。タンスの中には、母親の上等の着物がたくさんしまっていました。その上を、我が物顔で歩き回る「カマキリ」に、しばし呆然としていたそうです。

保育園から帰ってきたAちゃんに、別の箱に移した「カマキリ」を渡しながら、笑って言って聞かせたそうです。「お母さんもいい勉強したわ。カマキリの赤ちゃんって、かわいいわね。」と。

無闇に叱るだけでは、子どもの「心」は育ちません。子どもをその子なりの存在として認め、今何を求めているのかをしっかりと判断してあげることが、大切です。

おわりに

やさしい母親に育てられた人は、わが子にもやさしく接することができるが、厳しく育てられた人は、厳しくしてしまうことが多いようです。やさしくとも、厳しくとも、常に子どもの気持ちをくみとり、暖かく包みこんでやることが、「心」を育てる親としての役割りだと考えます。

主な著書

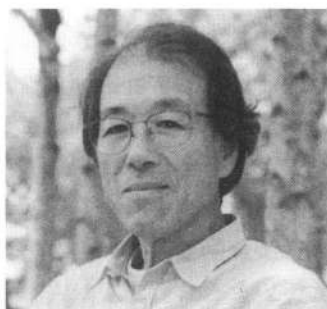
「ステキな子別れのために」(黎明書房)

「男の子育て、男の生き方」(黎明書房)

「親の心・子の心」(太陽社)

「望ましい家庭教育とは」(太陽社)

根っこ、開く、つなげる



元中野桃園教会幼稚園 園長
日本キリスト教団中野桃園教会牧師
塚田 孝

3年前、当教会付属幼稚園の50年の歴史を閉じると共に、私の30年の幼稚園の子供たちとの生活も終わりましたが、振り返って、表題の三つのテーマを課題にしてきたと思います。

まず、「根っこ」ですが、これは私たちの幼稚園の大事なキーワードでした。私がこの教会に赴任してきた時にはすでに20年のキリスト教保育の歴史があったわけですが、キリスト教保育とは何かといえば、神さまに喜ばれるよい子といった程度のことで、要するにおとなしくして、先生に教えられた通りにお祈りするような子が、先生によくほめられているわけです。少し乱暴だったり、じっとしてられない子だったりすると、「あの子は問題児だ」というようなことを、先生たちは平気で口にしているのです。そういう子が庭で遊んでいると、また何かやかすのではないかと、先生というのはどこかで監視している。子供と遊ばないのです。子供と遊んだら、別の側面だって見えてくるはずだと思うのですが。見方がクラスをまとめる先生の目になっていて、一人一人のおもしろさや多面性が見えていない。

たぶん創立以来だと思うのですが、月に一度リトミックの第一人者といわれる先生が指

導に来ておりました。とても厳しい人で、うまくできた子には手を取って上に上げ「日本いちー」とほめてあげます。しかし、リズム感の悪い子もいるわけですが、そんな時は隣のパートナーの子に「あんたは一人でやりなさい」といってできない子は輪の外に出されます。リトミックは子供の生活のほんの小さな断面にしかすぎません。それなのに日本一にされたり駄目な子にされたのではたまりません。これでは「神さまに喜ばれる素直なよい子」ではなく、単なる屈従を教えるだけです。

そこで私は園児募集案内の保育の基本目標に「自立した人間を目指して」という言葉を書いたわけです。自分の意見を持つ人間、自分の意思を自分で言える人間に育ってほしいということです。ちょうどその頃は西欧型の個を確立する人格形成、個性を引き伸ばす教育ということが言われてきた時代でした。

しかしこういう言い方にも落とし穴があります。自分の意見を自分の言葉で言えるのにはずいぶん個人差がありますし、必ずしも言葉によらなくても何かを表現しようとしていることがあります。それに親は欲ばりですから個性よりも＜特性＞を発見しがります。

そうすると、自立した子供とか個性を伸ばす教育というのも幻想をまき散らすうさんくさい言葉のように思えてきたわけです。

こういう保育の理念が私の中で大転換することになったのは、こどもたちと一緒に『水俣の甘夏』というドキュメンタリー映画を見た時からです。私たちの教会では12年間公害問題の原点といわれた水俣病の患者の自立のために、毎年数十万円の献金をしてきました。そんな関係でこの映画がで上がった時、試写会に招かれたのです。

水俣病になった漁師たちはもう海でのきつい仕事には耐えられなくなって、水俣湾を見下ろす丘に甘夏を栽培します。もちろん公害の原因になった窒素などの化学肥料は使わずに、有機肥料で甘夏を育てるのです。毎年、木を選んでどのくらい木が育ったかを、クレーンで甘夏の木を根っこごと引き抜いて調べるのですが、有機肥料で育てている木は、枝の広がり、広さにまで根が育っていて、見事なひげ根が育っているのです。感動的でした。

化学肥料は地上に出ている部分だけ立派にしようとする。農薬で虫を殺し、実が大きくなる薬を撒くわけです。ところが有機肥料で育った木はひげ根が発達し、根元に虫やバクテリアが住んでいて土を柔らかくしていたり、栄養のある土に耕してしてくれる。地中の目に見えない生き物たちが、生態系を豊かにしてくれて成長していくのだということが、こどもたちにも良く分かるのです。

ところがどうもこの頃の子育て、教育というのはまるで根のないクリスマスツリーに飾りつけをするように、お勉強、お稽古、スポーツ、体験なんかをぶら下げる。とにかくすぐ目に見えるものをくつつけたがる。しかし根が育っていなければやがて枯れてしまう。それ以来、この園の教育の理念を『根を育てる』と言うキーワードで表すことにしました。

その具体的一例ですが、この園では文字を教えることはまったくしませんでした。絵

本はできるだけたくさん読み聞かせてきました。根はいちばん底にあるもの、原点です。こどもの命が与えられて、最初に生きる場所はお母さんのお腹の中の羊水です。そこでは目も見えないし臭いもかいでいない。しかしお母さんの声だけは聞こえているのだそうです。お腹の中の赤ちゃんは全神経と脳の働きをお母さんの声に集中させて成長していくのだそうです。これが原点です。ですからお母さんのお腹の中から出てきても、こどもは耳から聞く声で脳を働かせ、想像の世界を豊かにしていくことに優れているのだと思います。

こどもは字が読めないから、大人が代わりに読んでやるわけではないのです。読み聞かせは単なる言語活動の初歩ではなく原初なのです。そういうことを早々に卒業させて、記号としての文字に早く入っていくのが教育だという考え方は、根のない教育のように思えます。

2番目のキーワードは『開く』です。教育というのはこどもたちと一緒に開いていく作業だと思います。というよりは開いていくのは楽しいことだと体験させることだと言った方が良いでしょう。私自身こどもたちと一緒に開くことの楽しさをたくさん味わってきました。

まず入園は受付順なので、どんな子でも入れます。一切選別なしです。ですから毎年1、2番に並ぶのはいろいろな障害を持っている子ということになります。情緒障害、知能障害、肢体不自由の子がいつも何人かみんなと暮らし合います。特別これに対して教師が余計にいるということもありません。近くの幼稚園で断られて、遠くから来る子もいますが、ほとんど近くの子です。つまり地域には必ず障害を持った子がいるというのが、私たちの生きている当たり前の世界なのです。ちょっと家族の概念を開いて地域に当てはめれば、障害を持った子はお金持ちの家にばかり生ま

れてくるわけではなく、貧しい家庭にだって生まれてきます。うちはお金がないからこの子が居ては困るとは言わないで、何とか一緒に暮らして行こうと思うはずです。私たちもその子がここに来たら、そこから一緒に暮らしていくことを考えようという、まず誰にでも『開く』ことを考えるのです。実際は大変なことも多いのですが、これが現実の面白さで、面倒見の良い子がいるもので、先生でも聴き取れない脳性マヒの子の言葉がその子には分かるのです。「アーちゃんがおしっこしたいって言ってるよ」とか「銀河鉄道（お父さんたちが園庭に造った大きなアスレチック）に昇りたいんだって」とか言うのです。これは本当に驚きです。ない物づくしの幼稚園なのですがいろいろな人間がそこに暮らしているという事実がそこにあるのですから。



大雪が降って銀河鉄道はスロープに

本当は社会はみんなが同じでなくても、能力や特徴にとてつもない差があっても、一緒に暮らし合うことが成立すれば、それで良い

わけです。ある知的障害者の親として立派な施設を造った方から、専門知識もなく、設備もないのに障害児を引き受けるのは無責任だと批判されましたが、福祉の根っこは立派な設備や知識ではなく、みんなが心を開くということではないでしょうか。心の通い合いを楽しみ経験として体にしみ込ませていけば、共生の根っこは必ず地面にしっかり根づくだろうと思います。

もうひとつは、教育の場がどれだけいろいろな人に開かれているかということです。幼稚園は学校教育法で規模に応じて資格者が何人いるか決められています。しかし教育にとっていちばん大切なのは設備でもなく資格でもありません。人間です。資格は2年間短大で学べば取れます。私の出会ったすばらしい教師？（学校教育法では資格のない人を教員とは呼びません）たちは、それぞれ専門的なものを持っていて私と出会い、この幼稚園の教師になりたいと言って、それぞれの専門的な分野をこどもたちとの生活に活かした人たちです。

例えば、渋谷のジャンジャンでシンガー・ソング・ライターとして歌っていた人。彼女がモンゴルの民族楽器馬頭琴の由来を伝える民話「スーホーの白い馬」の物語に歌をつけて歌うと何人かのこどもが必ず泣くのです。もう一人、ヴィオラやギターなど何でもこなす先生は、グループで造ったこどもたちの歌に曲をつけたり、たくさんのこの園だけのオリジナルの歌を作ってくれました。国際児童画コンクールの審査員をやった人もこの園の先生になりました。この人は自分のこどもの入園のために下見に来て、壁いっぱい描かれた共同制作のこどもたちの絵を見て、「負けたー」と言ったのが、それから数年後この幼稚園の先生になるきっかけでした。このほかにもインド舞踊家。皆専門分野ではなく、日常保育にかかわりました。もちろん無資格ですから、補助員です。保育のノウハウでは

なく、感性の豊かなひとたちです。教育の場がもっと開かれていたら、そこにどんなにすばらしい感性の持ち主が集まり、豊かな人間作りができるか知れません。

園外保育や合宿は八王子や小淵沢にまで遠征します。しかも、必ず電車や路線バスを使います。その途中でいろいろな人に出会うことがとても大事だと思います。これも「開く」です。出発が早いと遠いので、天気予報がはずれることも少なくありません。しかし、予測しないことに出会ったらどうするか、雨の中を歩くのだって楽しい発見はたくさんあります。いつもと違う条件にも体を開いていく。これもこどもの根っこを育てるのではないかと思います。

最後のキーワード『つなげる』はあらゆる意味での関係性を考えるということです。教育とは物事の関係性を教える、関係を考える人を育てることだと思います。専門バカという言葉がありますが、何かに専門的に深ければ、後は無関心でも許されてきました。却ってその方が偉い人のように見られたりします。しかしこれは学者や芸術家や作家の類のことばかりではなく会社で働く人たちにも言えます。どんどん製品を造って、最後にどうなるかはまったく考えてこなかった。見かけがよければ、食べる人の体のことを考えずに野菜に薬を撒き、食べ物に添加物を入れてきた。地球はどうなるのか、ごみはどうするのかを考えずに破壊し、資源を奪っては捨ててきたわけです。こういう事態は教育や人間造りと無関係ではありません。

教会の庭に夏みかんの木があります。30年前、私が赴任してきた時、ごみ捨て場に50センチほどの柑橘類の幼木がひょろひょろ生えていました。20数年経って初めて春先に白い花をつけ、その年は5個、3年目には50個以上の夏みかんがなりました。柑橘類の葉にしか卵を産まないあげはちょうが卵を産み、そ

の羽化の瞬間を子供たちとかがたずを呑んで見守りました。あげはちょうが来て花粉の交配を助けるので、今では数十個の実が何の手もかけずに、黄色いつややかな実を実らせませす。自然の見事な循環です。

園外保育で一日じゅう野山を駆け回るのは、その経験で充足するばかりではありません。そこで充足すると、その後で描く絵はエネルギーにあふれます。その絵に歌をつけよう。山で出会った野うさぎのことを、野うさぎの冒険の話に作って人形劇にして遊ぼう。拾ってきたどんぐりでTシャツを染めてみよう。実はあく抜きしてどんぐり団子を作っておじいさんおばあさんの日にご馳走しよう。次々に発展していきます。

当時文部省の指導要領では教育内容を言語、社会、健康、自然、音楽リズム、絵画制作の6領域に分けておりましたが、これは幼稚園教育を小学校に上がる前の予備教育と位置付けていたからです。しかし、私は幼児期の教育は身体の遊び、感性の遊び、知的遊びぐらゐに考えた方が良いと思っています。教えこまれるのではなく、自分から心が動いてやるのが遊びです。遊びですから、身体と感性と知の遊びには境目がなく、渾然一体となって流動的、生命的なつながりを持っている。こういうのを生きている営みと言うのではないのでしょうか。保育が子供のエネルギーの流れだとすれば、時にはカリキュラムを放棄しても、その流れを止めない、そういう感性を持った先生こそが必要だと思います。

この頃生態系のことが心配になっていますが地球は物質の固まり、単なる資源ではなく、実に敏感な生き物であることが分かってきました。そして人間にしても、動物にしても植物にしても何一つなくてよいものはひとつもなく、その個、違う個が実に微妙な調和として存在してきたのです。すべてのものは関係において存在していることを教えることが、いまいちばん必要なのではないのでしょうか。

ログハウスの幼稚園

～お山の大將 あつまれ～



恋瀬ほしのみや幼稚園

園長 古谷野 福子

まさかこんな所に幼稚園があるなんて、ここは誰もが不安げに登ってくる。加波山の麓を一本道の狭い小道に沿ってやっと一軒家がポツンと建っている。そこを通り過ぎると我が園がある。

本園は、ログハウスの平屋建で平成元年の創立で理事長先生の理念「自然が一番良い教材」の下に早や十年目を迎えている。振り返ると、やっぱりお山の幼稚園で良かったと実感していることをご紹介します。

春は、小鳥が子供達を迎えてくれる。メジロ・ホオジロ・シジュウカラなどが鳴いている。そして、山桜が大地の王様のように温かく包み込んでくれる。目や鼻がかゆいけれど、それは山での抵抗力がつくので仕方ない。それ以上に、のどかな山には魅力がたくさんある。小さな野草がつけている花は美しい。又自然がなす本物の色がある。それは、紫や黄や白等たくさんあって、特に山ツツジのオレンジ色と若葉は大地の息吹を感じる。そして広っぱには子供が大好きなタンポポやレンゲが子供達の目の中にいつも有り冠や首飾りを作っていて人気がある。クローバーの美しさ一枚一枚の形も色も違うので子供は見分ける術を知っていて語りながら摘んでいく。

園庭の斜面を下りていくと、砂場の回りに

は花と葉っぱの調和のとれた色彩がにぎわいを見せている。子供は自分で全てを用意する葉っぱの皿でいろいろな料理をのせて楽しんでいる。そうお母さんが台所で腕をふるっているのと同じ、子供の表情は喜んでくれる友達を思い一生懸命に作ってあげている。

夏、林の中にある幼稚園は毎日空気がおいしい。すがすがしい風は林の中からログ作りの特に保育室の南に吹き抜ける。気温は、真夏の暑さを和らげてくれる。ログの建物そのものが深呼吸しているかのよう、とても過ごしやすい。

すぐ南側に沢がある。恋瀬川上流であるが一年中豊かな水が流れている。ちょうど園児が水遊びできる手ごろな沢で特に危険ではなく浅くて広く水の音・せせらぎの音が園庭にいつも聞こえている。やはり山には沢の流れが相応しいし、そして最も暑い時はいつでも水（沢）遊びができる。まさしく夏の醍醐味である。

そして沢登りをせがむのは年長児で、二キロは簡単に行ってしまう。それは大変苦しい方が多いのに子供は何故か良い思い出になっているのである。

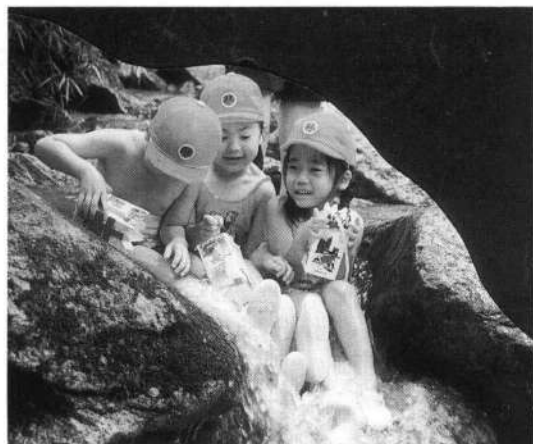
秋には、木の実や色とり彩の葉っぱで野も山も花盛り、その中をハイキング。コース作

りも又、楽しい。数えきれない程どんどん落ちてくるどんぐりやもみじの葉は、拾っても拾っても凄い勢いで落ちてくる。"なぜ落ちてくるの" 寒くなると葉っぱが山の土を温めてくれる。自然の営みを見て、子供の心は不思議だなと動いている。そして、畑の美味しい果物や野菜が収穫できる喜びを味わうことで大地の力強さを増して子供達は覚えていくのである。

冬の山は、北風が冷たくつい園舎の中で過ごしたいところであるが縄跳びを全園児持っているので各々が戸外に出て教え合っている。白い息を吐きながら、頬を真っ赤にしている子供の顔がとても頼もしく感じ、思わず保育者も年長児の百回を聞くと、一生懸命になって挑戦しているのである。

日だまりで「こま回し」に熱中している子供達もいる。昔ながらの木の「こま」と「ひも」を使い、長くまわせるように競争するものだがまわせない子は、まわせる子の「こま」をうらやましくみているがいつかはきっとまわさせてみせると思っている。

体が温まる遊びは、まだある。"すもう"であるが、体と体が接触することで人間同志の生温かさやぬくもりを味わいながら加減し、自分の力が出せる子、思うように出せない子がいるので興しう。勢いのある子供の身体はボールのようにはずんでみえる。そう、動きがはっきりしているので手の先から足の先ま



で集中している。

地形も起伏に富んでいる。常に園庭に降りる時は、すべらないように坂を下り、保育室に入る時は必ず坂を上がらなければならない。遊んでいる途中でトイレに行く時も同じである。入園当初は間に合わない子が何人もいるが、半年位で失敗はほとんどなくなっている。現代の子供には大変厳しい環境と思える本園の設置状況であるがセッティングした運動よりはるかに体力を使っている。

冬の間、雪が降ると少しの積雪でも山なのでマイクロバスはもう動かない。山の入口から三十分かかって蟻さんの行列のようにテクテク歩いて幼稚園にたどり着く。自然のプレゼントに感謝しながらソリ遊びが始まり、疲れ知らずの子供の運動能力は全開、何回も繰り返し滑っている。子供は、大満足である。



お山の幼稚園ははっきりと身体で四季を感じる。そして、身体と心を育ててくれる大地にたっぷり寄り添って生活をしていく子供達は一人ひとりがお山の大将と思っている。最後にログハウスの特徴。"やっぱりログだな"と思える点を述べたい。

- 気持ちが落ち着く ○湿度が一定に保たれる
- 天井が高いので広い 空間がある
- 感触が柔らかい ○保育室が換気される
- 展示物が自由自在につけられる
- ピアノの音を吸収してくれるので音色が優しい又、隣の保育室に迷惑がかからない。

育ちざかりのひと粒！

肝油＋ビタミンC
カワイ肝油ドロップC



肝油＋カルシウム
カワイ肝油ドロップM



お子さまからお年寄りまで、
どなたにも服用しやすい保健栄養剤です。
製品には、色素・人工甘味料あるいは
合成保存料などは
一切使用しておりません。

特 徴

体内での消化吸収がよい。
ビタミンが正確に含有されている。
ビタミンが安定に保たれている。
水なしで、かんで服用する。

健康教育
第140号

平成11年2月20日

発行所：河合製薬株式会社
東京都中野区中野6-3-5 電話 (3360) 7111(代)